

刊行にあたって

インプラント補綴臨床の全盛の時代に、有床義歯（入れ歯）は古すぎる。

“痛い、噛めない、笑えない” 入れ歯など、無用の長物であると患者や若い先生方から敬遠されるのも当然である。

患者の病態の進行に十分に対応できる有床義歯を作ることができていないのではないかな？

ならば、機能改善が著明で、患者、術者の満足度の高い有床義歯を作るための原因と対策を考えてみたい。多くの悩める歯科医師、歯科技工士、患者のために、受験生時代に活用した参考書のような歯科臨床の解説書を書いてみたい。さらに、従来から分類されている部分欠損補綴治療と無歯顎補綴治療を義歯という特性から捉えた本があれば、と考えてみた。

歯学部学生、歯科医師、歯科技工士も「クラウンブリッジ→局部床義歯→総義歯」の流れで、知識、手技を学ぶ。なぜならば、最初から無歯顎の患者はまず存在せず、1歯欠損から咬合支持を失い、多くの症例では、Eichnerの分類に従い咬合支持を失い、最終的には無歯顎になると思われる。

咬合崩壊の進行状態（歯牙―歯周組織の崩壊による、咬合支持の崩壊の進行順序）が、考え方の基本にある。

患者は、有床義歯補綴治療でなんでもよく噛め、健康を維持できる患者と、有床義歯補綴治療では満足できない（噛めない、笑えない、不健康など）と多くの不満をもち、歯科医療に対して不信感をもつ患者に分けられる。さらに歯科医師も後者の患者と接している間に有床義歯補綴治療に自信と熱意を失い、敬遠するという「患者―術者の負のスパイラルの循環」に陥っているように思われる。

しかしながら、有床義歯補綴治療を得意とし、多くの難症例患者に満足感を与え、健康長寿を実践しておられる歯科医師、歯科技工士が全国におられるのも事実である。これらの先生に共通していることは、知識と手技が身につき、正確な診査・診断に基づいて症例を場合分けし、精度の高い臨床術式を身につけられていることである。

日本にも多くの有床義歯補綴治療の大家、名物教授がおられたが、インプラント治療の発達により急速にその数は減少している。

患者は超高齢化時代を迎えて、80歳以上でも高いQOLを求めている。有床義歯によるQOLの維持、向上は、歯科医療人が関与すべき重要な課題である。

多くの歯科医療人が有床義歯補綴治療の本質、長所を理解して患者から高い評価を得て、健康長寿に貢献して「明るく、楽しく、喜ばれ、愛される」歯科医療を構築し、患者、スタッフ、社会から信頼され、尊敬される豊かな歯科医師人生を歩まれることを切望している。

本書が、臨床における欠損補綴治療に合格するための受験参考書「欠損補綴における有床義歯治療の傾向と対策」として役立てば幸いである。

上濱 正